聖　書：創世 41：1〜57
説教題：苦しみの地で、実り多い者と
日　時：2024 年 6 月 2 日（朝拝）

「それから二年後」と今日の章は始まります。ここに前回最後の部分から 2 年が経過したことを私たちは知ります。前の 40 章でヨセフは自分と同じ監獄に入って来た二人の役人の夢を解き明かしました。その内の一人である献酌官長が三日後に牢屋から出られると知ったヨセフは、彼に「あなたが幸せになったときには、どうか私を思い出してください。そして私のことをファラオに話し、私がここから出られるように恵みを施してください」と頼みました。しかし前章最後の節は「ところが、献酌官長はヨセフのことを思い出さないで、忘れてしまった」という言葉で結ばれました。そこから何も起こらないまま、2 年が過ぎたことを私たちは今日の章 1 節から知るのです。私たちはこの一行を読み進めるだけでヨセフが放置されたのは 2 年間だったと知りますが、ヨセフ自身は自分がいつ救い出されるのか前もって知ることはできません。彼としては望みを託した献酌官長に忘れられたと悟って再びゼロスタートの状態に置かれました。それ以来、これと思う導きは牢屋の中で与えられません。このまま自分の一生は監獄で終わるのかという恐れや不安、心配も彼の頭にはよぎったことでしょう。しかしついに「主の時」が来て彼はここから救い出されることになります。

その始まりはエジプト王ファラオが見た二つの夢でした。一つ目は彼がナイル川のほとりに立っていると、まずつやつやした肉付きの良い雌牛が 7 頭、川から上がって来ました。するとその後を追って醜くやせ細った別の雌牛が 7 頭、川から上がって来て、先の良く肥えた雌牛を食い尽くしてしまいました。その時、ファラオは目が覚めました。もう一つの夢も同じようなものです。見ると一本の茎に良く実った 7 つの良い穂が現れました。すると、その後を追ってしなびた東風に焼けた 7 つの穂が出て来て、先の 7 つの良く実った穂を呑み込んでしまいました。その時、ファラオは目が覚めました。彼の心は騒ぎ、エジプトのすべての呪法師や知恵ある者たちを呼び寄せましたが、誰一人解き明かすことはできません。その時、献酌官長がヨセフのことを思い出したのです。彼は 9 節で「私は今日、私の過ちを申し上げなければなりません」と始めて、かつて牢屋でヨセフが自分たちの夢を解き明かし、その通りになったことを告げます。それで 2 年が経ったこの時にヨセフは地下牢からはファラオの前へと呼び出されることとなったのです。

ヨセフはひげを剃り、着替えをして、ファラオの前に出ます。ファラオが「おまえは夢を聞いて、それを解き明かすと聞いたのだが」と問うと、ヨセフは 16 節で答えます。「私ではありません。神がファラオの繁栄を知らせてくださるのです。」　彼がすぐに神を指し示し、神に栄光を帰したことは、この 2 年間もヨセフは牢屋の中で腐っていなかったことを暗示しています。彼は自分が期待したように事が運ばなかった時、大いに落胆したでしょうけれども、なお神との生ける交わりに生きていたのです。ファラオは自分が見た夢についてヨセフに告げます。これを聞いてヨセフは、この二つの夢は一つです！と言います。「神が、なさろうとしていることをファラオにお告げになったのです」と言います。その内容とは、今すぐエジプト全土に 7 年間の大豊作が訪れるということ。そしてその後、7 年間の大飢饉が起こるというものです。その飢饉は非常に激しいため、先の豊作は跡も分からなくなると言います。夢が二度繰り返されたのは、このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさるからですとヨセフは言います。そこで彼は勧めます。今、ファラオはさとくて知恵のある人を見つけ、その者をエジプトの地の上に置かれますように！また国中に監督官を任命し、豊作の 7 年の間に収穫の 1/5 を徴収されますように。その彼らに豊作の年のあらゆる食料をすべて集めさせ、町々に保管なさいますように。そうすれば飢饉の 7 年がやって来ても、この地は滅びることがないでしょう！と。

あまりにも明快な解き明かしにファラオとすべての家臣たちは圧倒されたことでしょう。ファラオは「神の霊が宿っているこのような人が、ほかに見つかるだろうか」と述べ、「おまえが私の家を治めるがよい」と言います。ある人はヨセフはこのようにして、自分にその役が回って来るように誘導したとここを読みますが、そうではなかったと思います。彼は奴隷の身分にある者であり、今、突然ファラオの前に呼び出されたばかりの者であり、しかも外国人です。自分がこの大切な働きのために指名されるとは考えてもみなかったでしょう。ところがファラオによってヨセフは信じられないような位置に引き上げられることとなります。彼は王の右腕として国政を担当するいわゆる宰相の地位に上げられたのです。それで彼の指にはファラオがはめていた指輪がはめられ、亜麻布の衣服を着せられ、首には金の首飾りがかけられました。またファラオの第二の車を与えられ、彼の前では「ひざまずけ」と号令がかけられました。また彼は王からツァフェナテ・パネアハという名を与えられ、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが妻として与えられました。これらはみなヨセフが位の高い者とさ

れたことを証しするものでした。

ヨセフがこうしてエジプトの王に仕えるようになった時、彼は 30 歳でした。兄たちによって奴隷として売り飛ばされたのが 17 歳でしたから、あれから 13 年もの年月が経過していました。彼はエジプト全土を巡って、最初の 7 年間の内に食料をことごとく集め、町々に蓄えました。その量が海の砂のように非常に多くなり、量り切れなくなったので、ついには量るのをやめたほどでした。

さてヨセフには二人の子が生まれました。その名はヘブル語でつけられました。ヨセフはエジプトの高官とされましたが、イスラエル人としてのアイデンティティーを保ち続けたことが分かります。そしてこの二人の子どもの名前の内にヨセフがこの時どんな心境でいたのか、その思いを垣間見ることができます。まず彼は長子をマナセと名づけました。これは「忘れる」という意味の言葉です。51 節に「神が、私のすべての労苦と、私の父の家のすべてのことを忘れさせてくださった」からであるとあります。この彼の言葉から分かることは、彼の心には大きな傷があったということです。多くの人々も過去の痛みを覚える出来事、あるいはその記憶によって現在の歩みを支配されてしまっているということがあると思います。誰かが私に言った言葉、あるいは誰かが私にしたことが繰り返し思い出されて自分を苦しめる、トラウマになっているというようなことです。ヨセフにもそのような悩みはあったのです。ここに「私のすべての労苦」と「私の父の家のすべてのこと」という二つの言葉が並べられていて、このような場合は双方で補い合って一つの内容を指す場合が良くあります。そうだとすると、ここの「私のすべての労苦」は特にカナンの地における苦しみだったと考えられます。何と言っても思い出されるのは兄たちにされたことです。兄たちに罵られたこと、衣服をはぎ取られたこと、穴の中に投げ込まれたこと、助けを求めて叫んだのに無視されたこと、そして引き上げられたかと思ったら奴隷として売られ、家族から引き離されたこと、・・・。これらは相当なトラウマだったと思われます。何をするにしても彼の脳裏によみがえって来て、彼を苦しめるものだったと思います。しかし神が今やそれらをすべて忘れさせてくださったとヨセフは言っています。もちろんそれらの記憶が全部なくなったという意味ではないでしょう。完全に忘れることはできないと思います。しかし彼は今やそれらに囚われないで生きることができる者にされた。神がはるかにまさる祝福を恵んでくださることによって、いつまでも過去を見つめ、過去のつらい体験に支配されて生きるのではなく、今私をこのように導き、これ

からも導いてくださる神を喜んで生きることができるようにしてくださったということでしょう。またこれは単に過去を見なで忘れるというよりも、神の摂理という視点から自分の人生を眺めて、過去のことも無駄ではなかった、それらも私が今日このようにあるために神が用いられたことなのだと良い光のもとで見ることができるようにされたということなのでしょう。

また二番目の子をヨセフはエフライムと名づけました。これは「実り多い」という意味の言葉です。52 節に「神が、私の苦しみの地で、私を実り多い者としてくださった」からであるとあります。ヨセフはこの地に来て、苦しみの連続でした。奴隷としての歩みが始まり、まずは侍従長ポティファルの家で働きました。そこで信頼を勝ち取り、全財産を管理する者になりましたが、ポティファルの妻から無実の罪を負わされ、牢屋の中に放り投げられました。そこでも彼は信頼を勝ち取り、すべての囚人を世話する者になりましたが、今度は世話をした人から見捨てられ、忘れられるという扱いを受けました。彼は「神は、私の苦しみの地で、私を実り多い者としてくださった」と言っています。ここで「苦しみ」と「実り」は関係づけられています。苦しみの地においてこそ神は私を錬り聖め、私の人生を豊かなものにしてくださったと彼は言っています。ローマ人への手紙 5 章 3〜4 節 :「それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」　ヨセフはこうして神の摂理の光の下で自らの人生を振り返って慰められ、トラウマだらけのように思われた自分の人生を肯定し、神への感謝と賛美をささげるように導かれたのです。

53 節以降では豊作の 7 年が終わり、7 年の飢饉が始まったことが記されています。やがてエジプト全土が飢えると、ファラオは「ヨセフのもとに行き、ヨセフの言うとおりにせよ」と言いました。さらに飢饉は地の全面にも及び、あらゆる国の人々がヨセフのところに来るようになりました。そしてついにヨセフの兄弟たちもヨセフのもとに来るようになります。その様子が次章以降に記されることとなります。

以上の創世記 41 章。地下牢に閉じ込められていたヨセフは神の摂理によってエジプトの宰相の立場にまで引き上げられました。信じられないような逆転のみわざが記されました。神は私たちの思いをはるかに超えるご計画を持っておられ、完璧な摂理の御手をもって、御心を実現されるお方です。ヨセフだけでなく、私たち一人一人を

も同じ摂理をもって導いてくださる方です。

私たちは先ほどヨセフが神の摂理によってどんな慰めを得たか、二人の子どもたちの名前を通して学びましたが、その言葉に聞く時、多くのクリスチャンも――特に信仰の年数を重ねた方々は――自分にも当てはまる言葉として深く味わい、アーメンと言えるのではないでしょうか。私たちもそれぞれ心の傷、色々な悲しみ、トラウマなどを持っていた者たちであると思います。もしこの神に出会わなければ、いつもその思いに捕らえられたままだっただろうと思います。しかし神は恵みを上から豊かに注いでくださって、私たちがそれらを忘れることができるように導いてくださいました。いつまでもそのことに心が縛り付けられているという生活から解放してくださいました。むしろ神に目を高く上げ、神の素晴らしいみわざに思いを向けて歩むようにと導いてくださいました。また、神は確かに私をも苦しみの地で実り多い者としてくださいました。苦しみはない方が良いと思いますが、振り返ってみれば、神がご自身により頼むようにと私を強く引き寄せ、ご自身の恵みを示し、私に様々なことを教えてくださったのは私の苦しみの地とも言える時と場においてでした。詩篇 119 篇 71 節：「苦しみにあったことは私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。」

そしてこの神の摂理による慰めを私たちは天国に入る時、最も深く味わうことになるでしょう。私たちは地上でも神の摂理の素晴らしさの一端を味わいますが、その全部を知ることができるわけではありません。またクリスチャンは皆、地上で良い結果を得られるわけではありません。殉教によって生涯を閉じる人もいますし、また神にはその信仰や行いが知られていても、地上では無名の人生を送る人もいます。しかしやがて天に達した時、主を信じ主に従う者たちはみな、このヨセフの言葉を心から自分の言葉として言うように導かれるでしょう。神は私の地上のすべての労苦や痛みを、ご自身の恵みをもって癒やし、圧倒し、それらを忘れさせてくださった。また私は多くの苦しみの中を通ったが、神はその苦しみを通して私を聖め、訓練し、その人生を豊かなものとし、祝福くださった。私たちはその日に地上の自分の人生を神の摂理の下で振り返って深く慰められ、神にすべての栄光を帰すでしょう。そのゴールに向かって主は今週もヨセフに現したのと同じ摂理の御手をもって私たち一人一人の歩みを導いてくださることを信じて、主にすべての希望を置き、主に従う歩みを続けて行きたいと思うのです。